

平成13年春、蛭雪の功なり、新潟大学を卒業する皆さんに、心からお祝いを申し上げます。新潟大学は誇りと自信をもって、皆さんを社会に送り出します。

新しい世紀のはじめにあたり、激動の百年を振り返りますと、二十世紀は、科学、技術が急速かつ著しく進歩した世紀でありました。産業経済は飛躍的に発展し、知的交流は国境を越えて深くなり、地球は著しく狭くなりました。また、医学の進歩は、生命の神秘を解き明かし、難病を克服し、人類の生活は著しく向上しました。しかし、私達は、その代償として、地球環境の破壊、資源エネルギーや食糧の不足、人口の爆発的增加と少子化、高齢化の矛盾、多くの地域における宗教や民族の対立による殺戮など、難しい問題を抱えています。

今世紀は、私達がこれらの問題の解決に真剣に取り組まなければならない時代であります。生命の根源に迫り、新しい生物をも創り出す生命科学、新しいエネルギーを創り、美しい自然を取り戻す工業科学技術、世界の学術の成果や情報を瞬時に共有出来る情報伝達科学技術は、今後ますます発展することと思います。

また、これらの成果を真に人類全体の幸福に役立てるため、私達は民族、宗教、思想の違いを越えて、お互いに努力しなければならず、ここで人文社会科学の果たす役割は極めて大きいのであります。

我が国は、明治維新の開国以後、急速に近代化を実現し、また第二次大戦の挫折を越えて、奇跡ともいうべき復興を実現しました。しかし、大戦後半世紀を経た現在、政治、経済、産業、学術研究の仕組みに制度疲労がおり、新しい世紀を生き抜くためには、思い切った改革が必要であるといわれています。若い世代の殆どが高校に入学し、その半数が大学に進学する現在、大学は大衆化して、卒業生は社会の期待に届いていないと批判されています。たしかに、学歴は徐々にその価値を失っていますが(学歴エリートの消滅)、幅広く、奥深い教養と専門分野の優れた学識と技術を備えた、機能としてのエリートはますます求められています。

卒業を祝して



新潟大学長 荒川 正昭

G r a d

大学を卒業する皆さんは、常に志を高くもって、自らの目標に向かって、果敢に、そして創造的に、挑戦してほしいと願っています。新しい時代に求められる人材は、足元をしっかり見据えながら、目線は高く置いて前方を見つめ、勇気と創造性に溢れ、私のためだけでなく、公のために貢献出来る若者であります。皆さんを迎える先輩は、皆さんが何が出来るか、何がやりたいか、そして徹底してやり抜く決意の有無を問うており、皆さんの情熱と気概に大きく期待しているのであります。

私達日本人は、物真似上手ではあるが、新しいものをつくるのは不得意であると、したり顔で批判する人もいますが、いささか事実と違うように思います。我が国の明治以降の近代化、大戦後の復興の歩みには、私達の先達の独創的な力を見ることが出来ます。しかし、創造力は単なる閃きや思い付きではなく、基礎的な学力の充実があって始めて発揮されるのであります。皆さんは、大学において、それぞれの専門分野の基礎を十分学んだことと思いますが、さらに磨きをかける努力が大切です。古来、日本人の特性といわれている勤勉、真面目、几帳面、実直な生き方、そして伝統的な精神ともいえる創意工夫が、日本のモノづくりとして、世界に知られている創造性を支えていると思います。今問われているのは、私達がその心の在り方を失っているのでないかということでもあります。

私は、皆さんが新しい門出にあたり、心新たに、生涯勉強の気概をもって、人生に挑戦してほしいと申しましたが、同時に自分を取り巻く人達、世間への心優しい思いやりを忘れないで下さい。私は、四十年以上にわたって大学人として教育と研究を行ってきましたが、同時に、病に苦しみ、悩む患者さんのために働く医師でもありました。私が医師として、常に心においたのは、「人の為に生活して、己の為に生活せざるを、醫業の本體とす」(緒方洪庵：扶氏醫戒之略)という言葉であります。医師という存在は、あくまでも患者さんのためにあるもので、医療という仕事には、迷わず全力をあげて患者さんの命を救う心が求められているのです。「人の為に生活して、己の為に生活せざる」、誠に厳しい言葉ではありますが、そこに流れているのは、単なる奉仕や自己犠牲ではなく、苦しみ悩む人間を思いやる、人間として極めて自然な心であります。只与えられるだけでなく、自ら与えることを喜びとする、人間が人間である高貴な心であります。

最近のマスメディアをにぎわしている、若い世代の暴走、政、財、官、さらに大学にまでみられる不祥事の数々、病める人々、年老いた人々、弱い人々への思いやりを欠いた介護など、私は、私達が何か大切なものを忘れてきたのではないかと、心を痛めています。我が国の現状を評して、高学歴無教養社会であるという批判がありますが、大学で学び培った学識と知性、周囲の人々を思いやり、美しいものに感動する感性を、生涯勉強することによって磨きをかけ、自らの品性を高めてほしいのであります。

皆さんが、心身ともに健康で、大きく成長し、我が国の発展と人類の幸福のために活躍することを期待して、私の送別の辞といたします。



卒業にあたって・・・C.f.3 ~
退官にあたって・・・C.f.11 ~

u a t i

感謝

経済学部経営学科 李 春梅

あっという間に日本に来て五年目になり、それに今年日本の留学生生活はこれで終わる事になってしまい五年間本当に忘れられない事がいっぱいあった。日本に来る前に北京空港で両親との別れの涙、最初のホームシックの涙、それから初めてのバイト先の洗い場でのプライドの涙、それに新潟大学の合格通知書を見た時おもしろい嬉しい涙。...いつもニコニコしている私にはそんな泣く姿は想像できないだろうが今から振り返るととてもいい思い出と思っている。もしも両親から離れないと家での温かさを知らずに自立さえもできなかっただろう。もし中国から出なかったら客観的な考え方、見方を持ちにくかっただろう。もしもバイトしないとお金の重さ、親の辛さを感じにくかっただろう。もし日本語学校で一生懸命頑張らなかったら新大に入る事ができなかっただろう。留学を通じて、人生には悲しみがあれば喜びもあり、マイペースで努力すればいつか大きな力になるというのを学んだ。

本人前



o n



Ioana Balfag
Postgraduate student
Department of Fixed Prosthodontics
Faculty of Dentistry, Niigata University

Life and study in Niigata

大学院歯学研究科歯学臨床系専攻 I . パルタグ

I came from Romania as a research student, in January 1996. As many newcomers to Japan, I was very worried about my ability to live away from my family, to study in a foreign country and to adjust to foreign customs. Once in Niigata, I realized that I was surrounded by many kind people ready to help me in my study and to accustom to my new life. In less than one month all my fears had completely vanished and I was able to concentrate with joy on study and research in a faculty provided with the best high-technology equipment. As soon as my Japanese speaking ability improved a bit, I could make many friends inside and outside the faculty. Through them I got acquainted with Japanese life, food, and customs. I will never forget the annual parade across Bandai bridge on August 8th, the fireworks of Niigata and Nagaoka summer festivals, the beauty of rice fields in spring and of camellia blooms under the snow, the sunset over Sado Island. I can hardly believe that five years already flew away. It's difficult to enumerate in a few words all the good memories I am taking back home with me. I will miss a lot the kind advice of my mentors, the parties with my colleagues, the walks by the seaside, the "onsens", the taste of Niigata's rice, and so many other things. And I still have so much to learn in Japan. I really hope I will have the opportunity to come to Niigata again.



本人後列

夜間主コース万歳！

法学部法政コミュニケーション学科 本永 あかね

働きながらの大学生活は、仕事も学業も中途半端になり、物足りなさが残るものだったが、夜間主コースで学ぶことで得たものは予想以上に多かった。夜間主は、聴講したい授業が開講されないとか、通年でゼミが開講されないなど不利な点が多く、何を勉強したのかわからないまま卒業の時期を迎えてしまったが、私の場合、大学で学んだことといえば、講義の内容よりも、先生方を含めた様々な人との交流の中で得た人生の教訓だったかもしれない。年齢や職種の違いが集まる夜間主コースは、私が大学で勉強するには最適の場所であったといえる。新大祭に参加したかったとか、サークルに入りたかったとか、新潟大学でやり残したことはたくさんあるが、卒業代わりに書いた懸賞論文で賞をいただいたし、私には無理だと思っていたイギリス短期語学留学も実現させた。“やる気”と少しの“勇氣”さえあれば不可能なことはないのだ！ということを実感できた貴重な4年間だった。